

平成23年度 科学・技術関係予算概算要求 個別施策ヒアリング  
24010 女性研究者研究活動支援事業（文部科学省）

- 1 日時：平成22年9月7日（火） 14：30～15：00
- 2 場所：内閣府（合同庁舎4号館）1202共用会議室
- 3 聴取者：総合科学技術会議有識者議員 相澤議員、本庶議員、奥村議員、  
今栄議員  
外部専門家 5名（うち若手 2名）  
内閣府 岩瀬審議官、有松参事官
- 4 説明者：科学技術・学術政策局基盤政策課 猪股人材政策企画官

5 施策概要

女性研究者がその能力を最大限発揮できるようにするため、大学や公的研究機関を対象として女性研究者支援室の設置やコーディネーターの配置、出産・子育て期間中の研究活動を支える研究・実験補助者等の雇用経費の支援等、女性研究者が出産・子育て等と研究を両立するための環境整備を行う取組を支援する。

6 質疑応答模様

（相澤議員）このプログラムの特徴は、出産・子育て期間中に研究費プラス研究ないしは実験等の補助者の経費を含むのか。

（文部科学省）研究費は含んでいない。含んでいるのは研究補助者の雇用経費。研究補助者、実験補助者、ダブルでまとめて書いてしまってわかりにくかった。補助者の雇用経費のみで、研究費は補助の対象外。

（相澤議員）

補助者を付けることに関しては、実態はどういう状況と理解し、こういう施策を作ったのか。

（文部科学省）

自然科学系の女性研究者は昼夜を問わず実験を行う。出産、育児というライフイベントで研究が中断される恐れがある。そういった中で、女性研究者達の夜の実験の補助や、研究サポートなど、研究を補助するニーズがある。女性研究者からも、非常に有り難いという声もたくさんある。中間評価の中でも、実験研究補助者を置いた機関がすべてこういったやり方をとっている。

（相澤議員）

具体的にどういう人がくるのか。

（文部科学省）

ポストドクターのような方や、一度退職されたような方もあり得るのかもしれないが、先日ある大学に見に行ったところでは、20代後半のドクターをとった、これから色々な経験してみたい、本人自ら補助者を希望した方が女性支援室に常駐する形をとって、複数の育児・介護で補助を必要としている女性研究者のサポートをしている。一番念頭に置いているのは、ドクターをとっている若い方。実際選ぶのは女性研究者側。

(相澤議員)

そういう人がそのレベルでいる。ポストドクであるとすれば、その人のキャリアパスにおける位置付けというの、そう簡単に割り切れるものなのか。

(文部科学省)

指摘のようなケースは、中間評価でも例示として挙げた。補助者となった方が、その経験を積んで、研究実績を挙げられる位置にキャリアアップした例が、中間報告の中でいくつかなされている。私が見たポストドクは、女性研究者として独立したいという意欲はまだ無く、広い視野を身に付けたいという希望をもって、任期付きの補助者に手を挙げてきた。そういうケースもある。

(奥村議員)

その人は、助けている女性研究者の共著者になれるポジションなのか。なれないのか。本人のキャリアパスの関係もあって、単に手伝いということであれば、なれないはず。ドクターの必要性があるのかという問題もある。

(文部科学省)

補助者を必要としている女性研究者自らが自分で選ぶ。必ずしもドクターでなくとも。マスターかもしれない。ケースバイケース。

(奥村議員)

機関にお金を出すのでは。

(文部科学省)

機関にお金を出す。機関の中での手続きは、選ぶのは女性研究者で、そこにお金を付けている。

(外部専門家)

女性の研究支援というのは企業の中ではかなりのことをやっているが、子育てが終わるまで、何年も研究者が休むことを前提にしているのか。研究で何年もやめたら研究者でなくなる。大学にこういう部署は整備されているのか。

(文部科学省)

今、振興調整費で補助金支援。50いくつの大学。その大学はほとんどつけている。独自のポジションにあわせて。

(外部専門家)

それが本来の姿ではないのか。なぜ補助者という発想なのか、その背景を教え

て欲しい。

(文部科学省)

こういう需要もあって整備している。子供預けておけば安心というわけではないこともあり、研究を一時期お休みしなければならない特有の時期が存在する。

(外部専門家)

多少の期間はわからなくないが、そこだけを想定しているのか。

(文部科学省)

1つはそういう方の受け皿。それから、子供を預けっぱなしでなく、自分の力で育てたいという方もおり、一日のうち何時間はというケースも。

(外部専門家)

プロフェッショナルな研究者が、そういうことで本当にやっていけるのか。

(相澤議員)

今の件に関連して。その大学がその支援者を、1人なり2人なり用意して、それで女性研究者の複数の人にそれぞれ対応させる、そういう仕組みか。今の質問もそういうところに関わると思うが、ある特定の女性研究者にぴったりと補助者がついて、パートナーシップを組んでずっと進むのか、それとも、イベントのある期間派遣的にいくような仕組みなのか。どちらか。

(外部専門家)

両方のパターンがある。

(今栄議員)

研究実験補助者になることによって、ポジティブな方向の報告だったが、実際はむしろこういうポストがあるから、ドクターとって行くところがない女性研究者を一時的にポストにつける、そっちの方が実態として多い、そういう人達を女性研究者としてカウントしている。方針はよいが、実態を、補助者の方がどういう状況になっているかをサーチして欲しい。

(文部科学省)

比較すると女性が多いということがあるが

(今栄議員)

もちろん男性もいるが、研究者であるのか、本当に補助者であるのか、中間的なところの雇用が行われているという数が多くなっている。その数が増えるのを心配している。それと、10大学は少ない気がする。できるだけ広くという話があったが、10しか選ばないのは予算の都合か。

(文部科学省)

今までのモデル育成事業では、だいたい10前後の採択を前提で募集をしており、2倍から3倍の応募があった。そこから考えて、同等の数、倍率でこれくらいと考えている。

(今栄議員)

女性研究者の数が増えない一つの要因は、補助されている大学はどんどん伸びているが、そうでないところは、まったく支援がないために保育所もできない、そういうことで伸びないということがある。数の制限はあるが、実際の支援の対象になっていない大学がどういう状況かを把握して欲しい。

(文部科学省)

今回の補助事業を創設したのも、振興調整費5年だけでなく、もっと広く続けていたいということ。10で少ないということだが、毎年新しく増やしていくという考え方で伸ばしていきたい。

(外部専門家)

実験補助者の先程からの議論は、現実的ではないと思う。実験補助者を雇って、すぐにうまく実験するのは不可能。もう1人子供が増えるようなもので、それこそ大変。出産・子育ての支えになるのか疑問。それから、コーディネーターの実質的な必要性だが、コーディネーターの職務例が書いてあるが、コーディネーターでなければできないようなものではなく、一種の事務員でも構わないような気もする。女性研究者の相談などは、普通の業務。一体何が女性支援のコーディネーター、重要な役割を果たすのかが明確でない。例えばアメリカで女性研究者が多いのは、実はカラクリがある。旦那が就職するときに、実は旦那は研究者であることが多いのだが、大学は女性研究者の職場を見つけてあげる。ポストドクの場合もあり、ファカルティの場合もあるが、そうした工夫をして女性研究者支援を大学全体でやっている。それが社会的に認められている。例えば、秘書にするのもあり。それを認めることによって、奥さんが職を失わないようにする。それが、社会的に認められている。必ずしもファカルティではないが、研究を続けているということ。むしろそういう工夫をした方が良いと思う。

(外部専門家)

本題から離れるが、試み的にやっておられるのは、非常にチャレンジングで良い。少し思いつきのなところが見え隠れするが。これはこれで、もしよい方向に働けば、3年といわず、次のステップも考えられると思う。現実には3年で終わって、また次々とポリシーが変わって、次々と出てくると思うが、例えば、これで良かったかというアウトカムメジャーをどういう風に置かれて、次をどうするか考えないと、次々ポリシーが3年後にやってきてしまって、本当に5年、10年ぐらいのロングタームで、アップの方に行っているのかということがよくわからないが、その辺はどう考えているのか。

(文部科学省)

重要な指摘。こういった補助事業を始める場合には、外部の専門機関に委託を

すると話したが、補助の実態はどうなっているのか、効果が上がっているのか、外部の評価委員を交えた評価の場を設けていきたいと考えている。この施策については、科学技術基本計画の中で目標値が定められている。それに向かってきちんと達成されているのか、全国的にも見た上で、また施策の効果が上がっているのか検証した上で次の科学技術基本計画の見直しに・・・

（外部専門家）

上がっているのか評価するのに、目標、セッティングがないとそれに近づいているのかわからない。アウトカムメジャーの設定がちょっと見えない。色々なやり方があるのに、なぜこのやりかたを選んだのか論点整理を。

（文部科学省）

科学技術基本計画では採用における女性の比率ということだが、それだけでなく、途中で離職していないかという指標も考えられる。また、女性に継続的にアンケート調査をとっており、多面的なデータを分析の指標の検討に使っていききたい。単に女性研究者の頭数が増えたということだけでなく、途中やめていないか、環境に不満がないか、きちっと評価したい。

（相澤議員）

今のご指摘のあったところ、これまでの科学技術振興調整費から、文科省が独自予算で進める切り替えの次期でもあり、大変重要なところ。総合科学技術会議としても大変評価するところだが、今の指摘のように、色々な根拠を元に綿密に新しい制度なのかということに対しては、今日の議論がでたような問題点もあるので、さらにそこは慎重に計画そのものをしていく必要があるのではないか。

（文部科学省）

有り難うございました。

以上